

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 28 号

平成 16 年 8 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

南原繁著作集第 10 巻より(1)

南原 繁（明治 22 年 昭和 49 年）

内村鑑三、新渡戸稲造に学んだクリスチャン。政治哲学者。

昭和 20 年 12 月から 26 年 12 月まで、東京大学総長として、敗戦に打ちひしがれた当時の国民、学生に向けて勇気と希望を与える数々の名講演を行った。また、内閣におかれた教育刷新委員会の委員長として、教育基本法、6・3・3・4 制の学校制度、教育委員会制度などの戦後の教育改革の中心人物であった。のち学士会理事長、日本学士院院長。私は、昭和 42 年にお会いして、お話を伺って以来、そのお人柄に引かれ、著作を読み、我が生涯の師と仰ぐようになりました。私は、「真善美・信仰」という先生の著作のエッセンスを納めた本を編集・発行しました。

南原 繁 略年譜

- 明治 22 年 9 月 5 日 香川県大川郡相生村に生まれる。
- 明治 43 年 第一高等学校卒業（新渡戸稲造校長）。
- 明治 43 年 内村鑑三の聖書講義に加わる。
- 大正 3 年 東京帝国大学法科大学卒業。内務省に奉職。
- 大正 10 年 内務省を辞し、東京帝国大学助教授に就任。
- 大正 10～13 年 英・独・仏に留学。
- 大正 14 年 東京帝国大学教授。政治学史の講義を始める。
- 昭和 20 年 12 月 東京帝国大学総長に就任。
- 昭和 21 年 教育刷新委員会副委員長。22 年委員長。
- 昭和 25 年 吉田茂首相、南原繁を「曲学阿世の徒」と呼ぶ。
- 昭和 26 年 東京大学総長を退く。
- 昭和 39 年 学士会理事長に就任。
- 昭和 45 年 日本学士院院長に就任。
- 昭和 49 年 5 月 19 日 永眠（84 歳）。
- 主要著書 「国家と宗教」、「政治理論史」、「フィヒテの政治哲学」、「形相」、「日本の理想」、「歴史を作るもの」等。「南原繁著作集」全 10 巻がある。

現代をいかに生きべきか（１）

（１９６６年１０月２５日、花巻みなみ幼稚園落成式における講演）

東京に出てくると、さすがに驚いた。…それはその当時の一高の雰囲気 校長には新渡戸稲造先生がおられ、その先生を中心とした一高の学生たちの雰囲気に驚いたのであります。…この新渡戸先生はご承知のとおり、盛岡のご出身でありまして、今日から見ましても明治、大正、昭和を通じて、これだけ深い教養を持った先生は、まずなかったと申してもいいと思います。この先生が、当時の一高の校長であったということは、非常に大きな影響を、私どもの時代の青年たちに与えた。これは大したものだったと思います。先生は我々に何を教えたかと申しますと、一言で申せば、「諸君は外面のいろいろなことをしようとする前に、自分の内面を省みようではないか。自分のうちから人間を気付き上げていこうではないか」と。先生の好んでおられたイギリスの１９世紀の思想家トーマス・カーライルをよく引用しまして「何をなすべきか」(t o d o)のまえに「なにであるべきか」(t o b e)ということ、まず考えよということが、先生の一番大事な教えであったと思います。

現代をいかに生きべきか（２）

私がここで教養というのは、何もむずかしい哲学書を読んで初めてわかるということではありません。小説でもよろしい。詩でも歌でもよろしい。およそ人間の魂を揺り動かすような、我々の心から共鳴するような、そういう世界に目を開くということでございます。したがって、読書力としては新制高等学校卒業程度のものがあれば充分であります。それは人間が人間として一つの間目覚めであります。読書に限らない。およそ、美しいもの、善いもの、これに目を向けるということです。よい音楽でもよろしい。美しい絵画でもよろしい。そういうものに関心を持つということは、どんなに人間の心を、人間性を開発できることか。こういう世界を教養の世界と私は思うのです。

現代をいかに生きべきか（3）

先ほど申した私の学んだ一高の例をとりますと、今日も旧制高等学校を廃止したことに対して郷愁を感じる人はたくさんいます。けれども、私どもが受けた旧制高等学校における教養はなんと申しても限られておった。少数の人に限定されておった。…それはそれでよしいけれども、今日はもはや、限られた指導者とか、エリートというものの教養でありませんで、広く国民大衆の教養でなければなりません。…私は民衆文化という言葉を用いております。

そういう意味の教養は、必ずしも学校においてだけ学べるというものではございません。また学校がすんだから、それで卒業したということでもございません。学校にいかんでも、また学校を卒業した後も、およそ人間の生きる限り、生涯を通じて絶えずみがかくべきもので、どういう職業の人でも、これが人間をどんなに豊富にするか、人間に本当の幸福を与えるか。詩を、歌を愛し、あるいはよい書物に親しんでいる方はわかると思います。それは知識人とか学者だけの世界ではございません。誰でも人間として耕すべき共通の世界であると思います。

現代をいかに生きべきか（４）

ところがここに一つの問題が起こります。それは私が申し上げましたような教養の道を励んでいくことによって、果たして私どもの人間が完成するのかという問題でございます。これは大問題であります。先程申し上げました私の高等学校時代の経験にかえりますが、新渡戸先生の教えに刺激されまして、友人たちと一緒に教養の道に励んでいった。だんだん書物を読み、善いもの美しいものを慕い、ひたすら内面の世界を求めて努力していくに従って大きな矛盾が出てきた。しまいには、わからなくなってしまった。ソクラテスの「汝自身を知れ」という言葉がございしますが、その自分自身がわからなくなった。…

そこで私どもは、できることならば、（華嚴の滝に身を投じた藤村操のような）自己破滅の道でなく他に生きる道を求めた。そういう次第で、一高の３年の生活において、学課は二の次でありまして、そういう指導者を求めて精神の遍歴をしたわけでございます。（仏教界では、近角常観、キリスト教界では海老名弾正あるいは植村正久など）当時我々は友人と相携えて、精神の遍歴をしたのであります。

現代をいかに生きべきか（５）

私とは申せば、そういう遍歴の最後に落ち着いたのは『聖書の研究』という、ちっぽけな、20何ページかの雑誌です。その雑誌が結局、私の最後の決定的なものになった。これは・・・内村鑑三という方が発行していた雑誌であります。この内村鑑三という方は、先程申した新渡戸稲造先生と同級です。ただいまの北海道大学の前身、札幌農学校の出身で、互いに机を並べて勉強した秀才でありました。・・・

当時の東京の郊外柏木に引きこもられて、聖書一巻を研究されたのであります。先生の主宰した雑誌『聖書の研究』は私どもの高等学校時代には、大した靈感に満ちたものでありました。評論家の山路愛山という人がこの内村の文章を形容して「内村の文章を読むと頭のとっぺんから電気に打たれたごとく感ずる」という意味の賛辞を呈したほどでありました。ところが内村先生の門は極めて狭く、普通の教会のようにたくさんの人を歓迎しません。私どもは幸い少数の友達と一緒に入門の機会を得た。これが、私の柏木に通う初めでございます。・・・そして聖書が私の書物の中の書物になりました。・・・それが私の一つの大きな転機でございます。

現代をいかに生きべきか（6）

そこで問題は、…人間が本当に教養の道に励んで内面の世界を探求して、自分を突き詰めて参りますと、どうしても一つの壁にぶつかる。それは人間悪という問題であります。哲学者のカントは、これを「根源悪」と称した。この悪と対決するためには、どうしても人間を越えた絶対的なものを考えなければ不可能である。それは古来、人間の求めてきた宗教の世界であります。この世界は、今日どんなに自然科学が進歩いたしましても、…神の国が近くなるわけではございません。また電子顕微鏡が発達しまして、どんなに微細なものを見ることができるといたしましても、人間の靈魂は見る事ができない。これは世界が違います。そういう精神の世界というものは人間には見えないけれども、一つの大きな世界であると思えます。…

ゲーテはこう言った。「自然科学的な認識でとうてい認識することのできない問題の前にたった時には、われわれはその前に帽子を脱いで敬意を表しよう。畏敬をもってその前に立ちどまろう」と。我々の知識をもって解くことのできない世界は、それを否定せず、その前に立ちどまって敬意を表する。

現代をいかに生きべきか（ 7 ）

私は小中学校の先生に時々会いますが、そういう人々からよく質問を受ける。戦後、日本に教育基本法という教育勅語に変わるべき法律ができた。この中には新しく宗教についての条項がある。宗教に対する尊敬と寛容ということが規定された。これを一体どうして児童や生徒に教えるのであろうかというのであります。このときに私は先生方に言うのです。特別なミッションスクールなどの学校は別ですけれども、普通の学校で宗教を教えるということは無理です、また教えてはならぬと私は思う。たとえ、教師が無神論者であろうとも、皆さんに願うことは、その子供に何も教えんでもよろしいから、ただ神がないとか、仏がないとか、否定的な態度をとらないで、それを白紙のままにそっと子供に残しておいてもらいたい。それが最小限度の要求である。そうすれば必ずやその子供が一人一人大きくなって、自分で自分の問題と取り組んで必ず発見する世界である。わたしはこういうのであります。そうではありませんか。

そういう一つの大きな世界に対しては、我々はよろしく敬意を表すべきであります。

現代をいかに生きべきか（８）

今日、多くの既成宗教や、伝統的な宗教が、力がないというのは宗教家自身にも責任があります。もともと原始仏教が持っていた力を失い、宗教が形式化し制度化した。そこに精神的な力がなくなった。真の宗教は、現代のこういう複雑な世界に対しても我々の生き方に力を貸し、本当の生命を与えるものでなければならぬと思う。宮沢賢治は読経三昧にふけていつも家にこもっていたわけではない。ご承知のとおり「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」あっちこっちを足を搦粉木（すりこぎ）にして、不幸な人を見舞って世の幸福をはかった。これが真の宗教です。もとより今日の時代は賢治の生きた時代ではありません。問題はより重大複雑であります。私が言いたいのはキリスト教でも、仏教でも、宗教がほんとうの宗教であるならば生きた精神と生命をもって現実のただ中であって我々の態度を決定する。ただ人が言うから、それに雷同するというのでなしに、自ら決定する真の力はそこからくると思う。

以上申し述べました教養、道徳、宗教というのは個人の内面の世界であります。けれども、内面に満ちあふれてきたならば、その力は必ずや外に向って働きかけなければならない。

現代をいかに生きべきか（ 9 ）

現在、歴史はそうした暗い面ばかりではなく、明るい面として、私が申し上げたいのは、国連の舞台で7、8年前、フルシチョフ首相が全面軍縮を提唱した。これについてケネディが、同じく世界の完全軍縮、軍備撤廃を提唱した。これは人類歴史以来初めてのことです。もとよりその完全なる実施は、おそらく21世紀にかかるかもしれません。その間紆余曲折がありましても、世界歴史の帰趨は動かないでしょう。そういうときに、日本国憲法の第9条において、日本が完全軍縮を提唱、軍備の撤廃を宣明したことは、国民がそれを自覚したか否かは別として、新しく日本国民に課せられた大きな民族的使命だと思えます。自ら掲げた旗は降ろさずに行こうではありませんか。

現代をいかに生きべきか（10）

最後にいま一度、宮沢賢治を引用しますと、彼は何と言いましたか。「世界全体が幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」といっている。これは真理です。今日、われわれは単に日本国民だけではございません。同時に全世界と全人類に結ばれている。全人類の運命がすなわちわれわれの運命にかかわります。どうか、他人の幸福のために、全世界の人々 幼い者を含めて の平和と幸福のためにつくしましょう。それによって、われわれ一人一人の真の幸福が得られます。

どうか再びわれわれは旧い日本に帰らないで、新しい国民の使命としても日本が率先して、世界の平和の砦となりましょう。皆様の中には 21 世紀に生きる人々があり、少なくとも園児は皆 21 世紀をつくる人たちです。もう再び皆さんにお目にかかることもなかろうかと思えます。たとい私はどこにありましても、当地を忘れず、この幼稚園の成長と花巻の発展を祝するであります。

（注）この講演は、昭和 41 年 10 月 25 日に、花巻みなみ幼稚園の新園舎落成式において語られた講演である。南原先生は、園長の照井登久子さんと内村先生、斎藤宗次郎先生を通じた信仰上の友人であり、講演に招かれた。「回想の南原繁」に寄せられた照井さんの追想に寄れば、このときの講演は 2 時間にわたり、常にも増して力が入って、満堂を埋めた聴衆はひとしく魅了されたとある。ちなみに、花巻は、宮沢賢治の生まれた地でもある。